

# エマソンとヤコブ・ベーム

## —コールリッジを媒介として—

高梨 良夫

### 1 はじめに

『長野県短期大学紀要』第73号（2019年3月）においては、ドイツの神秘思想家ヤコブ・ベーム（Jacob Böhme, 1575-1624）の生涯とキリスト教神秘主義思想に対するエマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）の共感を指摘し、また両思想家の思想の類似点と相違点についての考察を試み、顕著な類似性が見出されると論じた。しかしながら同時に、19世紀のニューイングランドに生きたエマソンと16世紀後半から17世紀前半のドイツに生きたベームとの時代と地理的距離の隔たりを考慮すると、ベームの根幹的思想は、19世紀に大西洋を隔てたエマソンに直接的影響を与えたというよりも、ヨーロッパにおいてベームの影響を強く受けたイギリス・ロマン主義の詩人・批評家コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）、さらにドイツ観念論哲学の思想家シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854）などを介して、エマソンにも影響が及んだ可能性が大きいのではないかと指摘した。それ故本稿においては、ベームのコールリッジに対する影響、さらにコールリッジのエマソンに対する影響について考察することを通じて、ベームの思想が如何にしてコールリッジを媒介としてエマソンに影響を与えたのかについて考察してみる。

### 2 コールリッジを媒介としたベームの思想のエマソンに対する影響の概観

#### 2-1 コールリッジに対するベームの影響

コールリッジはベームから多大な影響を受けたことを記している。<sup>1</sup> コールリッジは

1 ベームとコールリッジについては、高山信雄『コールリッジとドイツ文学者』（こびあん書房、1993年）、28-53頁；「コールリッジとドイツ文学（二）—コールリッジとヤコブ・ベーム—」『法政大学教養部紀要』第57号（1986年）、17-42頁などを参照。またベームの思想については、南原実『ヤコブ・ベーム—開けゆく次元—』（以下『ヤコブ・ベーム』と略記）（哲学書房、1991年）、岡部雄三『ヤコブ・ベームと神智学の展開』（岩波書店、2010年）、31-102頁などを参照。

『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*, 1817) 第9章で、自らの著作の内容とシェリングの『自然哲学への理念』(*Ideen zu einer Philosophie der Natur*, 1797)と『超越論的観念論の体系』(*System des transcendentalen Idealismus*, 1800)における思想との類似について、「私の作品にシェリングとの思想の一致、あるいは表現の類似さえあったとしても、それは必ずしもシェリングから文節を借用した証拠とか、着想を得た証拠にはならないということです。…最も明らかな類似点の多くは、いや実際のところ、そのすべての主要な基本的考えは、このドイツ人哲学者の書物を一頁も見ないうちに私の心に生まれ、熟成したのです。さらに嘘偽りなく断言しますが、それはシェリングのもっと重要な作品が書かれる以前、少なくとも公表される以前のことでした」<sup>2</sup>と記し、シェリングから剽窃し、着想を得たのではなく、シェリングの作品の公表以前に、基本的な考えは自らの心の中で熟成していたものであると弁明している。さらに「シェリングの体系とベーメのある種概念との一致に関して、シェリングは単なる偶然の一致であると断言していますが、私自身が得た恩恵はもっと直接的なものでした。彼はただ共感の思いをベーメに寄せればいいだけですが、私はベーメに恩義があるのです」<sup>3</sup>と記し、シェリングは自らの思想とベーメの思想との一致は単なる偶然に過ぎないと述べているが、自分はベーメから直接的な影響を受け、ベーメは自らの思想形成に極めて重要な役割を果たしてきた思想家であったことを告白している。

コールリッジは、ベーメなどの神秘家は無学で卑しい職業に就いていたという理由で、知識階級の人々や聖職者達から迫害を受け、狂信者や夢想家の烙印を押されてしまったと、ベーメを真に神の創造的靈感に導かれ、概念的分析的認識を超え、自然万物と人間の魂の深淵を探求した天才であると擁護しながら、次のように記している。

ベーメの妄想は、実に数多く粗野なものであり、敢えて独力で思索したこの貧しい無学な靴職人を、学者たちが打ち負かすに十分な機会をしばしば与えてしまったのでした。しかし、これらの妄想は、彼には知的訓練がすべて完全に欠落していたことから、そしてまた合理的な心理学を彼が知らなかったことから、予期され得るものであったことは念頭に置くとしても、そうした欠点は当時の

2 東京コールリッジ研究会訳『文学的自叙伝—文学者としての我が人生と意見の伝記的素描—』(以下『文学的自叙伝』と略記)(法政大学出版局、2013年)、136頁; S.T. Coleridge, *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. W.G.T. Shedd (New York: Harper and Brothers, 1864, reproduced by Rinsen Book co., Kyoto, 1989), vol. 3: *Bioraphia Literaria; or, Biographical Sketches of my Literary Life and Opinions*(以下 *BL* と略記), pp. 263-64: "... an identity of thought, or even similarity of phrase, will not be at all times a certain proof that the passage has been borrowed from Shelling, or that the conceptions were originally learnt from him. ... many of the most striking resemblances, indeed all the main and fundamental ideas, were born and matured in my mind before I had ever seen a single page of the German Philosopher, and I might indeed affirm with truth, before the more important works of Shelling had been written, or at least made public."

3 同上書、137頁; *Ibid.*, p. 264: "The coincidence of Shelling's system with certain general ideas of Behmen, he declares to have been *mere* coincidence; while *my* obligations have been more direct. *He* needs give to Behmen only feelings of sympathy; while I owe him a debt of gratitude."

最も学識のある神学者たちにも共通する欠点であったことを忘れてはいけません。… ヤコブ・ベームは、最も厳密な意味において、熱中家 (enthusiast) でした。つまり、熱狂家 (fanatic) とは単に違うというだけでなく、正反対として区別される熱中家だったのです。… 学問の真の深みや内奥の中心 … に到達することは、無学な人たちや低い身分の人たちに委ねられてしまったのです。果てしない憧れや生来の満ちあふれる精神が彼らを突き動かして、万物の内にある生きた基盤の探求へと駆り立てたわけです。<sup>4</sup>

## 2-2 エマソンに対するコールリッジの影響

コールリッジがエマソンの思想形成に多大な影響を与えたことは多くのエマソン学者が認めている。ウィッチャーは、『自然論』(Nature, 1836) に直接的な知的影響を与えた二人の人物はコールリッジとスウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772) である。… エマソンに影響を与えたのは「老水夫行」や「クブラ・カーン」などの詩を詠んだ詩人としてはなく、『文学的自叙伝』の折衷的哲学者、及び『政治家必携の書』(The Statesman's Manual, 1816)、『友』(The Friend, 1809-10)、『省察の助け』(Aids to Reflection, 1825) などを執筆した英国国教会の説教師としてのコールリッジであった。… エマソンの思想形成における触媒としてのコールリッジの重要性はいくら強調してもし過ぎることはない<sup>5</sup>、またカーペンターは、「1929年以降の7年間コールリッジは恐らくエマソンの文学生活に対して最も重要な影響を与えた唯一の人物であった」<sup>6</sup>と記している。ラスクの『エマソン伝』によると、エマソンは1929年の秋から冬にかけてコールリッジの著作を熱心に読んだ。<sup>7</sup> この頃叔母メアリ (Mary Moody Emerson, 1774-1863)、兄ウィリアム、弟エドワードに宛てた手紙には、コールリッジの『友』、及び当時バーモント大学学長のマーシュ (James Marsh, 1794-1842) が編纂した『省察の助け』を非常に興味を持って読んでいることが記されている。<sup>8</sup> 次はエマソンの人格形成に大きな影響を与えた叔母メアリに宛てた、1829年12月10日の手紙である。

4 同上書、127-128頁；Ibid., pp. 249-251: “Many, indeed, and gross were his [Behmen’s] delusion; and such furnish frequent and ample occasion for the triumph of the learned over the poor ignorant shoemaker, who had dared think for himself. But while we remember that those delusions were such, as might be anticipated from his utter want of all intellectual discipline, and from his ignorance of rational psychology, let it not be forgotten that the latter defect he had in common with the most learned theologians of his age. … Jacob Behmen was an enthusiast, in the strictest sense, as not merely distinguished, but contra-distinguished, from a fanatic. … Therefore the true depth of science, and the penetration to the inmost centre, from which all the lines of knowledge diverge to their ever distant circumference, was abandoned to the illiterate and the simple, whom unstilled yearning, and an original ebullency of spirit, had urged to the investigation of the indwelling and living ground of all things.”

5 Stephen E. Whicher, ed., *Selections from Ralph Waldo Emerson* (Boston: Houghton Mifflin, 1957), p. 471.

6 Frederic I. Carpenter, *Emerson Handbook* (New York: Hendricks House, 1953), p. 223.

7 Ralph L. Rusk, *The Life of Ralph Waldo Emerson* (New York: Columbia Univ. Press, 1949), p. 143.

8 Ralph L. Rusk and Eleanor M. Tilton eds., *The Letters of Ralph Waldo Emerson*, 10 vols. (New York: Columbia Univ. Press, 1939-95), vol. 1, p. 291, Jan. 4, 1830.

私はコールリッジの『友』を大変興味深く読んでいます。…しかし何という生き生きとした魂でしょうか。何という広大無辺の知識を持っていることでしょうか。…絶えず活動してやまない人間の魂が、古い思索の狭い境界を破り、その淵に立っている未知の世界の秘密を知ることが切望するのです。…少なくとも私は、今まで一度も会ったことのなかった一つの新しい精神と知り合ったのです。<sup>9</sup>

さらにエマソンは、1832年12月から1833年10月にかけてのヨーロッパ旅行中、『イギリス国民性』(*English Traits*, 1856)に記しているように、1833年8月5日には、ロンドン郊外のハイゲートにコールリッジを訪れ、会見している。<sup>10</sup>この会見は実際にはエマソンを満足させるものではなかったが、帰国後のコールリッジが他界した1834年7月以後になって、再びコールリッジに対して新たな興味を抱くようになり、『自然論』を出版した1836年までの間、コールリッジを本格的に研究した。この時期に読んだのは『友』、『文学的自叙伝』、『教会と国家の構成原理』(*On the Constitution of the Church and States*, 1829)などであり、「理性」(Reason)と「悟性」(Understanding)、「想像力」(Imagination)と「空想力」(Fancy)、「天才」(Genius)と「才能」(Talent)の区別、そして極性(polarity)などの超越主義思想(Transcendentalism)の根幹となってゆく学説を学んだ。エマソンは1829年から1833年の間は『友』と『省察の助け』を読み、主として宗教家・形而上学者としてのコールリッジを研究したのに対し、1834年から1836年の間は、『友』と『文学的自叙伝』を読み、主として文芸批評家・心理学者としてのコールリッジを研究したと言えるであろう。<sup>11</sup>エマソンは、1835年ボストンで試みた10回にわたる英文学に関する講演のなかで、『文学的自叙伝』は英語で書かれた最良の批評書であると述べ、文芸批評家としてのコールリッジを、次のように礼賛している。

コールリッジの真価は哲学者や詩人としてではなく、批評家であることにあります。…彼は極めて鋭敏な識別力を備え、…彼の行った区別の見事さにおいてはどの人をも凌いでいます。…そして彼は、道徳的、知的、社会的な世界を極めて広範に概観したのです。…彼の『文学的自叙伝—文学者としての我が人生と意見—』は、英語で書かれた最も優れた批評書です。…私はどの言

9 Ibid., vol. 7, pp. 188-89, Dec. 10, 1929: "I am reading Coleridge's 'Friend' with great interest. ... but what a living soul, what a universal knowledge! ... the restless human soul bursting the narrow boundaries of antique speculation, and mad to know the secrets of that unknown world on whose brink it is sure it is standing, ... At least I become acquainted with one new mind I never saw before."

10 *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson* (以下CWと略記), eds. Alfred R. Ferguson, Joseph Slater, Douglas E. Wilson et al., 10 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1971-2013), vol. 5, pp. 5-7.

11 コールリッジのエマソンに対する影響については、高梨良夫『エマソンの思想の形成と展開—朱子の教義との比較的考察—』(金星堂、2012年)、199-203頁; Sanja Sostaric, *Coleridge and Emerson: A Complex Affinity* (Dissertation. com, 2003); *Biographical Dictionary of Transcendentalism*, ed. Wesley T. Mott (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1996), pp. 48-50; and Frank T. Thompson, "Emerson's Indebtedness to Coleridge," *Studies in Philology*, vol. 23 (Jan., 1926), pp. 55-57などを参照。

語であれ現代の学者がこれ程多くの恩義を受けられる批評書を他に知りません。… 彼自身の見解によれば、『文学的自叙伝』の半分、『友』第三巻の「方法に関するエッセイ」の少数の詩を加えた始めから終わりまでは、彼が作品において心に留めているもののすべてでした。そしてこうした見解に、『教会と国家の構成原理』と呼ばれる、その後にかかれた計り知れない程貴重な小さな書物を加えれば、私はすべての優れた評者の意見が一致するだろうと思います。<sup>12</sup>

### 3 ベーメ、コールリッジ、エマソン

本節では、ベーメの思想がコールリッジを媒介として如何にしてエマソンに影響を与えたのかについて、対立者の一致、神人同一、想像力と空想などのコールリッジの思想の核的概念をめぐっての考察を通じて、明らかにしてみる。

#### 3-1 対立者の一致

ベーメは、錬金術の三原質、すなわち硫黄、水銀（メリクリウス）、塩（サル）の一つの硫黄をスルフ（Sulphur）と呼び、スルを自由に向かうルスト、喜びの生命の起源、フルを自然に向かう欲、エッセンス的の生命の起源であると、次のように『シグナトゥール・レーラム—万物の誕生とするしについて—』（1622年）に記している。

スル（Sul）は、第一プリンキウムにおいては自由な意志、あるいは無から有るものものになりたいたいというルスト（Lust）であって、自然の外の自由のうちにある。フル（phur）とは、自由な意志の欲（Begierde）であって、このフルという欲のうちには本体（Wesen）をつくる。… ところで欲であるフルは、スルと切り離せず、それは一語であり、もともとひとつの本体でもある。それがみずから二つの性質（Eigenshaften）、つまり、喜び（Freud）と苦しみ（Leib）、光（Licht）と闇（Finsterniß）に分裂する。こうして、きびしさのうちには闇の火の世界、自由のルストのうちには光の火の世界という二つの世界が生じる。… これが、ガイストの生命の姿と、エッセンス的の生命の姿なのである。スルとはよるこびの生命の起源であり、フルとはエッセンス的の生命の起源である。… 自由の欲は、おだやかで明るく、神と呼ばれる。自然へとむかう欲は、自分で自分を闇で塗り込め、干からびて、怒りっぽく腹をすかしている。その名は、神の怒り、または闇の

---

12 *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, eds. Robert E. Spiller, Stephen E. Whicher, and Wallace E. Williams, 3 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1959-72), vol. 1, pp. 378-79: "His [Coleridge's] true merit is not that of a philosopher or of a poet but a critic. ... He possessed extreme subtlety of discrimination; ... surpassing all men in the fineness of distinctions he could indicate, ... he has taken a survey of the moral, intellectual, and social world ... his singular book called *Biographia Literaria*, or his own literary and opinions, is undoubtedly the best body of criticism in the English language. ... I do not know a book on criticism in any language to which a modern scholar can be so much indebted. ... In his own judgement, half of the *Biography* and the third volume of the *Friend* from the beginning of the *Essay on Method* to the end with a few of his poems were all that he would preserve of his works. In this judgement, if you add the invaluable little book called *Church and State* which was written afterwards, I suppose all good judges would concur."



世界。これを名づけて第一プリンキピウム (Principium) という。これに対して光の世界は、第二のプリンキピウム。しかも両者はもともと分離せず、たがいに相手を包み込み、たがいに相手の原因と起源、そしてまた相手を癒す薬となっている。<sup>13</sup>

このようにベーメの思想においては、怒りの神の顕現、永遠の闇、苦の泉、暗黒の火、永遠の自然のはじまりの領域としての第一プリンキピウムと、火に対する光、愛、へりくだり、やさしさの天使の世界、体と形があるものの本体の領域としての第二プリンキピウムの二つの領域が、『大いなる神秘』(1622年)に記されているように、一つの根源を持ちながらも分離し合い、一にして二という裏腹の関係で二元的に存在している。

このショック、あるいは火が燃えつくときに、二つの国が分かれる。とはいえ、二つはあくまでも一つ。しかし、二つの国は、本性 (Essentz)、性質 (Qual)、意志においてたがいに分かれ、たがいに相手の姿が見えず、それ自体の性質のままに他を理解できず、それにもかかわらず一つの根源から出ているのであって、たがいにもちつもたれつ、片方がなければ無であり、二つはすべてその性質を一つの根源から得ている。<sup>14</sup>

ベーメは善だけでなく悪もまた神、人間、自然のうちにあり、善悪の対立、闘争を通じて調和が現出すると考えている。自らの思想形成に際してベーメの思想の影響を直接的に受けたコールリッジにおいては、ベーメの矛盾したものの統一という思想は「対立者の一致」という概念で展開されている。<sup>15</sup> コールリッジは、『文学的自叙伝』、第12章に、客観

13 南原実訳『シグナトゥーラ・レールム—万物の誕生とするしについて—』(以下『シグナトゥーラ・レールム』と略記)、キリスト教神秘主義著作集、第13巻(教文館、1989年)、20-21、23頁; Jacob Böhme, *De Signatura Rerum, oder der Geburt und Bezeichnung aller Wesen* (1622), 2:12-13, 16, 23: “Sul ist im ersten Principio der free Wille oder die Lust in dem Nichts zu Etwas, es ist in der Freyheit ausser der Natur; phur ist die Begierde der freyen Lust, und machet in sich in dem phur als in der Begierde ein Wesen. ... Nun ist aber das phur als die Begierde nicht von dem Sul getrennet, es ist Ein wirt, und ist auch um Urstand Ein Wesen., und sheidet sich selber in zwo Eigenshaften, als in Freud und Leib, in Licht und Finsterniß, dann es macht zwo Welten, als seine finstere Feuer=Welt in der Strengheit, und eine lichte Feuer=Welt in der Lust der Freyheit. ... Dieses ist nun die Gestalt des Geist=Lebens, und des essentialischen Lebens: Sul ist der Urstand des Freuden=Lebens, und phur ist der Urstand des essentialischen Lebens. ... Die Begierde der Freyheit ist sanft und lichte, und wird Gott genant, und die Begierde zur Natur macht sich in sich finster, dürre, hungerig und grimmig: die wird Gottes Zorn genant, und die Finster=Welt, als das erste Principium; und die Licht=Welt das ander Principium, ist zwar kein abtheilig Wesen, sondern eines hält das andere in sich verschlossen, und eines ist des andern Anfang und Ursache, auch Heilung und Artzney.”

14 『ヤコブ・ベーメ』、143頁; Jacob Böhme, *Mystieum Magnum*, 4:1: “In diesem Schracke oder Feuers=Anzündunge scheiden sich 2 Reiche, und sich doch nur Eines: Aber sie theilen sich in der Essentz, Qual und Willen, werden auch einander unsichtlich, keines begreiffet das ander in seiner eignen Qual, und sind doch aus Einem Urstande, hangen auch aneinander, und wäre Eines ohne das Ander ein Nichts, und nehmen doch alle beyde ihre Qual von Einem Urstande.”

15 コールリッジの極の理論については、高山信雄『コールリッジ研究』(こびあん書房、1984年)、89-122頁、田村謙二『コールリッジの創造的精神—統一性、分裂、統一性の回復—』(英宝社、1997年)、83-117頁参照。

的なものと主観的なもの、自然と知性との関係について、次のように記している。

そこで、単に「客体的」なものの総体を、これからは「自然」と呼ぶことにします。ただし、この用語を、自然の受動的かつ物質的な意味に限定するとともに、自然の实在を私たちに認識させるあらゆる現象を包含するものとして用います。他方、「主観的」なものの総体は、「自己」または「知性」の名において理解されるでしょう。知性と自然という二つの概念は必然的に対立関係にあります。知性はもっぱら表象するものとして、自然はもっぱら表象されるものとして考えられます。前者は意識するものとして、後者は意識のないものとして考えられるのです。さて能動的な認識というあらゆる行為において、これらに必要なのは両者の相互的協働、つまり意識的存在と、それ自体は無意識的なものとの協働です。<sup>16</sup>

客観的なものを最初に在るものとするならば、これと合体する主観的なものが付随して発生することを説明しなければならない。… 主観的なものを最初に在るものとするならば、そこに生じる問題は、どのように客観的なものが主観的なものに付随して起こるか、ということである。<sup>17</sup>

コールリッジは、主観的なものと客観的なものとはそれぞれ次元が異なる領域に属し、対立し合いながらも、互いに相手が必要としている関係にあり、根源は一つとみなしている。ペーメの第一プリンキウムはコールリッジにおいては「客体」、「自然」、第二プリンキウムは「主体」、「自己」に相当する。

エマソンは、コールリッジの自己と自然との二元的な分離という概念を、『自然論』の序論に、次のように記している。

哲学的に考えると、宇宙が「自然」(Nature)と「魂」(Soul)から構成されている。だから厳密に言うと、われわれから分離されているすべてのもの、「哲学」が「非我」(NOT ME)として区別するすべてのもの、つまり自然も人工も、すべての他人もわたし自身の体も、ことごとく「自然」

---

16 『文学的自叙伝』、第12章、223頁；BL, ch.12, p. 335: “Now the sum of all that is merely OBJECTIVE, we will henceforth call NATURE, confining the term to its passive and material sense, as comprising all the *phenomena* by which its existence is made known to us. On the other hand the sum of all that is SUBJECTIVE, we may comprehend in the name of the SELF or INTELLIGENCE. Both conceptions are in necessary antithesis. Intelligence is conceived of as exclusively representative, nature as extensively represented; the one as conscious, the other as without consciousness. Now in all acts of positive knowledge there is required a reciprocal concurrence of both, namely, of the conscious being, and of that which is in itself unconscious. Now in all acts of positive knowledge there is required a reciprocal concurrence of both, namely, of the conscious being, and of that which is in itself unconscious.”

17 同上書、224、226頁；Ibid., p. 336, 338: “Either the Objective is taken as the first, and then we have to account for the supervention of the Subjective, which coalesces with it.”; “Or the Subjective is taken as the first, and the problem then is, how these supervenes to it a coincident Objective.”

という名まえのもとに分類されなくてはならぬ。<sup>18</sup>

また主観的なものと客観的なものは相互に相手を必要としている関係にあるというコールリッジと同様の考えを、エマソンは次のように記している。

そもそも人間が本来アナロジスト（類推家）であり、あらゆる物象のなかに関係を探る。…そして人間を理解するためにはこれらの物象がぜひとも必要で、これらの物象も人間なしには理解できない。<sup>19</sup>

さらにコールリッジの「対立者の一致」は、「極性」(polarity)の概念としても知られている。極性とは磁気（陽極と陰極）や電気（プラスとマイナス）などの現象にみられるように、自然は対立する二つの力から新たな階層、調和が統一的に形成されるという理論である。エマソンはコールリッジの影響を受けて、エッセイ「償い」(“Compensation,”1841)に、二元的な「極性」が自然界、さらに人間界をも支配していると、次のように記している。

極性、つまり動と反動とは、自然のあらゆる部分でわれわれが会うことだ。たとえば闇と光、熱と冷、潮の干満、雄と雌、植物や動物の吸う息、吐く息、動物体を流れる液体が保つ量と質との平衡、心臓の収縮と拡張、液体や音の波動、求心的で遠心的な引力、電気、流電気、化学上の親和力。… 一種の必然的な二元性が自然を二つに分けていて、そのために、ものはそれぞれ半分に過ぎず、当然おのれを完全にしてくれるべつのもので存在を暗示している。たとえば精神には物質、男には女、奇数には偶数、主観には客観、内には外、上には下、動作には休止、肯定には否定。…

同じ二元性が人間の本性と状態の基礎にもなっている。あらゆる過度が欠乏を、あらゆる欠乏が過度をひき起こす。あらゆる甘味にはそれぞれに酸味が、あらゆる悪にはそれぞれに善がともなう。快楽を感じとるあらゆる能力は、乱用すると、それに見合うだけの罰を課せられる。過度に用いると、いのちを与えて報いることになる。わずかな知恵にも、ひとつひとつ、わずかな愚鈍が対応している。失ったものがあれば、その代償として、必ず何かほかのものが手に入っており、

18 酒本雅之訳『エマソン論文集（上）』（岩波文庫、1972年）、38-39頁；*CW*, 1:8: “Philosophically considered, the universe is composed of Nature and the Soul. Strictly speaking, therefore, all that is separate from us, all which Philosophy distinguishes as NOT ME, that is, both nature and art, all other men and my own body, must be ranked under this name, NATURE.”

19 同上書、59頁；*Ibid.*, 19: “[M]an is an analogist, and studies relations in all objects. ... And neither can man be understood without these objects, nor these objects without man.”



手にはいったものがあれば、必ずその代償として何かを失う。<sup>20</sup>

### 3-2 神人同一

ベーメの思想の中核となっているのは神人同一説であり、人間は神の似姿、像、顕現であると考えられている。ベーメは神の究極的根源を、二元的対立を超越した人格以前の「無底」(Ungrund)と規定し、『キリスト、人となる』(1620年)に、「…人間は神の真の似姿(Gleichniß)であって、神はそれをこの上なく愛し、自分自身の本体であることの似姿のうちにみずからをあらわにする」<sup>21</sup>と記されているように、人格以前の「無」(Nichts)なる神が自らの姿を見出したいと憧れ、欲し、顕れ出た結果として最終的に結んだ像が人格を備えた人間とされている。また同時に、「神は、人間の内部の中心であり、中心の中心である。もともと、神は、自己自身のなかに住む。しかし人間の精神(Geist)が神とひとつの精神となるとき、神は人間性のうちに、その心情、感覚、欲望のうちに、みずからをあらわし、心情は、神を感じず。さもなくば、神はあまりにも玄妙細微で、私たちは神を見ることができない」<sup>22</sup>とあるように、神のガイストは人間に内在し、人間の側からも神と同一化することの出来る神人合一の可能性についても記している。

コールリッジは主観的自己が絶対的自己にまで高まった神人同一の境地を、次のように『文学的自叙伝』、第12章において I AM (我あり)と表現している。

我々は存在の絶対的な原理を究明しているのではなくて、認識の絶対的な原理を究明しているのだ。… 換言すれば、哲学は宗教に取り組み、宗教は哲学を含むようになるであろう。我々は「自己自身を知る」ことから始め、最後に絶対的な「我あり」(I AM)に達しようとする。「自己」から

20 同上書、248-50頁；CW, 2:57-58: “Polarity, or action and reaction, we meet in every part of nature; in darkness and light; in heat and cold; in the ebb and flow of waters; in male and female; in the inspiration and expiration of plants and animals; in the equation of quantity and quality in the fluids of the animal body; in the systole and diastole of the heart; in the undulations of fluids, and of sound; in the centrifugal and centripetal gravity; in electricity, galvanism, and chemical affinity. ... An inevitable dualism bisects nature, so that each thing is a half, and suggests another thing to make it whole; as spirit, matter; man, woman; odd, even; subjective, objective; in, out; upper, under; motion, rest; yea, nay. ... The same dualism underlies the nature and condition of man. Every excess causes a defect; every defect an excess. Every sweet hath its sour; every evil its good. Every faculty which is a receiver of pleasure, has an equal penalty put on its abuse. It is to answer for its moderation with its life. For every grain of wit there is a grain of folly. For every thing you have missed, you have gained something else; and for everything you gain, you lose something.”

21 『ヤコブ・ベーメ』、191頁；*De incarnatione verbi, oder Von der Menschwerdung Jesu Christi*, II: 10-8: “... ein Mensch das wahre Gleichniß ist, welches Gott hoch liebet, und sich in dieser Gleichniß, offenbaret, als in seinem eigenem Wesen.”

22 同上書、95頁；Ibid: “Gott ist im Menschen das Mittel, das Mittelste, aber Er wohnt nur in sich selber; es sey denn daß des Menschen Geist Ein Geist mit Ihme werde, so offenbaret Er sich in der Menschheit, als im Gemüthe, Sinnen und Begehren, daß Ihn das Gemüthe führet, sonst ist Er uns in dieser Welt viel zu subtil zu shauen.”

着手し、歩を進め、ついには「神」のうちに自己のすべてを失うと同時に自己のすべてを見出すのである。<sup>23</sup>

このような特質を持つこの原理は、SUM すなわち I AM として現れる。今後私はこれを区別なしに精神・自己・自己意識という語によって表すことにしよう。これにおいて、これにおいてのみ、客体と主体、存在と認識は一致し、それぞれ一方が他方を包含し想定している。… しかし、もし我々の概念を絶対的的自我、あの偉大で永遠な I AM まで高めてゆくならば、存在の原理と認識の原理、観念の原理と実在の原理、すなわち、存在の根拠と、存在の認識の根拠は、絶対的に同一となる。<sup>24</sup>

エマソンは、ベーメ、コールリッジと同様の神人同一の境地を、1830年10月3日に試みた「君自身を信頼せよ」(“Trust Thyself”)と題する説教において、次のように述べている。

我々は自らの心の声にひたすら耳を傾ければ傾けるほど、普通の意味における利己的な人間になるのではなく、低俗なものからより離れてゆき、真理と神に依り頼むようになるのです。というのは、魂の価値というのは、そのなかに神的な原理 (divine principle) があり、神の家 (house of God) があり、永遠の住人 (eternal inhabitant) の声が常に聞こえる、ということにあるからなのです。<sup>25</sup>

さらにエマソンは、1831年7月15日の『日記』に、「私たちの内なる神 (God in us) が神を礼拝するのだ」<sup>26</sup>と表現し、さらに同年11月23日の『日記』には、祈りについての同

23 『文学的自叙伝』、237頁；BL, ch.12, p. 348: “We are not investigating an absolute *principium essendi*; ... but an absolute *principium cognoscendi*. ... In other words, philosophy would pass into religion, and religion become inclusive of philosophy. We begin with the I KNOW MYSELF, in order to end with the absolute I AM. We proceed from the SELF, in order to lose and find all self in God.”

24 同上書、233-34頁；Ibid., pp. 344-45: “This Principle, and so characterized, manifests itself in the SUM or I AM; which I shall hereafter indiscriminately express by the words spirit, self, and self-consciousness. In this, and in this alone, object and subject, being and knowing, are identical, each involving and supposing the other. ... But if we elevate our conception to the absolute self, the great eternal I AM, then the principle of being, and of knowledge, of idea, and of reality; the ground of existence, and the ground of the knowledge of existence, are absolutely identical.”

25 *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*, eds. Albert J. von Frank et al., 4 vols. (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1989-92), vol. 2, p. 267, Sermon No. 90: “In listening to more intently to our own soul we are not becoming in the ordinary sense more selfish, but are departing farther from what is low and falling back upon truth and upon God. For the whole value of the soul depends on the fact that it contains a divine principle, that it is a house of God, and the voice of the eternal inhabitant may always be heard within it.”

26 *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* (以下 JMN と略記), eds. William H. Gilman, Ralph H. Orth et al., 16 vols. (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1960-82), vol. 3, p. 273: “God in us worships God.”

様の考えを、次のように記している。

というのは、神はどんな人間に対しても、ただ猛烈に祈り求めたからといって理に合わぬ願いをききとどけることは期待できないのであって、人間が神と次第に一つとなり、正しいもの、すなわち神の欲するところを祈り求めるようになるに従い、それに正比例して、祈りがきかれるからだ。そして、人間がまったく神に近い (wholly godly) 存在となり、いいかえれば、人間の内なる神 (God within) が次第に開顕して、一切をおのれに服従せしめたとき、そのとき人間はただ神の欲するところのみを祈り求めるようになり、彼の祈りはすべてかなえられるのだ。<sup>27</sup>

### 3-3 想像力と空想力

ベームにおいてイマギナチオン (Imagination) とは、イメージし、思いを形つくる力、意志 (Wille) が像 (Bild) のうちに自らをつかむ力を意味し、『シグナトゥーラ・レーラム』に記されているように、愛と敵意、喜びと苦しみの両方に向かう。

こうして明らかに、よろこびと苦しみ、愛と憎しみすべては、イマギナチオンとルストにその起源があり、まことに、神へとむかうルスト、自由な愛へとむかうルストのうちのよろこびの王国が死の不安の只中に開け、そしてまた欲が自由の愛を離れて死の不安、すなわち闇の泉 (Qual) のなかに入っていくと、欲は死の泉で溢れ、メリクリウスもまた死の泉のうちにあらわれる。<sup>28</sup>

人祖アダムは、イマギナチオンの力によって、神の意志と愛を実現すべく神の似姿として創造されたにもかかわらず、悪魔の誘惑により、誤ったイマギナチオンによって空想をたくましくし、調和と統一を失い、神のもとを離れ、悪の世界への転落の運命をたどることになる。

悪魔は、美しい天使、蛇は、賢い動物、人間は、神性の映像であった。これら三者の破滅のもととなったのは、イマギナチオンと驕り高ぶりであった。そのため、偽の快樂に対して神の呪い

---

27 小泉一郎訳『たましいの記録』エマソン選集全7巻(日本教文社、1960-61年)、第7巻、124頁; *JMN*, 3:308: "For it is not to be expected that God should gratify any man in an unreasonable request only because he asks it violently, but precisely in proportion as a man comes into conformity with God, he asks right things or things which God wills, and which therefore are done. And when he is wholly godly or the unfolding God within him subdued all to himself, then he asks what God wills and nothing else and all his prayers are granted."

28 『シグナトゥーラ・レーラム』、91-92頁; *De Signatura Rerum*, 8:11: "Also verstehen wir, das Freud und Leib, Liebe und Feindschaft, alles durch Imagination und Lust urstände, dann in der Lust gegen Gott, als gegen der freyen Liebe, entsteht das Freudenreich mitten in der Todes=Angst: Und so die Begierde aus der freyen Liebe ausgehet in die Todes=Angst, als in die Qual gefüllet, also qualificiret auch der Mercurius in Todes=Qual."

を招くこととなったのである。<sup>29</sup>

墮落したアダムの神の像としての姿を回復し、救済するのは「第二のアダム」としてのキリストである。<sup>30</sup> 人間の救済は、十字架上のキリストにならって、神の意志に逆らう自己を否定する決断を自らの意志で下し、イマギナチオーンの力を愛と喜びに向かわせ、火のなかをくぐり抜けることによって悪、闇、死を克服し、再び天の喜び、愛、光の領域に移行することによって実現する。

キリストが死んだとき、アダムは、キリストの死とともにその我性に死んだ。…キリストは、第一のアダムの像のなかに入り、こうして第一のアダムは、キリストの人間性を通して、おなじキリストとなり、蛇を踏みつぶす者となる。…第二のアダムは、死の死のなかに入り、死の死を自分のなか、アダムの人間性のなかにとらえ、死に対する死となり、生命を死から救い出して、永遠の自由へと導き、神の全能のうちに、第一のアダムの本体となって立ち上がった。語る永遠の言葉のなかの神のガイストが、キリストの人間性を通して、アダムを死から救い出したのである。<sup>31</sup>

コールリッジは、ベーメのイマギナチオーンの影響を強く受け、宗教的で難解なベーメのキリスト教神秘主義の思想体系を同時代人にも理解し易くなるように、独自の想像力 (Imagination) に関する理論として再構成している。『文学的自叙伝』第13章において展開されている想像力説によると、精神 (Spirit) には、自己を認識しようとする「求心力」と、自己を拡大しようとする「遠心力」があり、二つの対立する力が相反しながら統一しようとする作用によって、多様で有限な物質的形態をとって顕れ出る。求心力は、ベーメの体系においては、内側に収縮する性質としての渋さ、サル (塩) に、遠心力は、激しく暴れ、外に向かう性質としての苦み、メリクリウス (水銀) に相当する。それ故想像力は、形象を作り出し、精神と物質との間で媒介的な働きをする力 (intermediate faculty) である。さらにコールリッジは、神による万物創造の際に働く力を「第一の想像力」 (primary Imagination)、一度失われた精神と物質の統一を回復するために働く「再創造」 (re-creation) の力を「第二の想像力」 (secondary Imagination) と定義し、次のように記し

29 同上書、66-67頁；Ibid., 7:7: “Der Teufel war ein schöner Engel, und die Schlange das listigste Thier, und der Mensch die Gleichniß der Gottheit. Nun sind sie doch alle drey durch Imagination und Erhebung verdorben, und haben von Gott den Fluch erlanget für ihre falsche Lust.”

30 第二のアダムとしてのキリストについては、『ヤコブ・ベーメ』、209-16頁参照。

31 『シグナトゥーラ・レーラム』、180-81頁；*De Signature Rerum*, 12:8-9: “Da Christus starb, so starb Adams seine Ichheit in Christi Tod mit. ... Christus ging ein in das Bild des ersten Adams, also, daß der erste Adam in der Menschheit Christi, derselbe Christus und Schlangen=Treter ward. ... Der andere Adam ging in Tod des Todes ein, und nahm den Tod des Todes in sich, als in Adams Menschheit, gefangen: Er ward dem Tod ein Tod, und führete das Leben, in die ewige Freyheit, aus dem Tod aus. Er stund in Göttlicher Allmacht in des ersten Adams Wesen auf: Gottes Geist in dem sprechenden ewigen Worte, führete Adam in Christi Menschheit aus dem Tode aus.”

ている。

さて「想像力」について、私はそれを第一あるいは第二のいずれかとして考えます。第一の「想像力」はあらゆる人間の知覚の生きた力であり主要な行為者であって、それは無限の I AM における永遠の創造行為を、有限な心のうちで反復するものと私は考えます。第二の想像力は第一の想像力の反響であり、意識的な意志と共存しますが、その行為の種類においては第一の想像力と同一であって、ただその程度とその働きの様式においてのみ異なっているのです。<sup>32</sup>

第二の想像力が第一の想像力と異なるのは、人間の自覚的意志と協働して働く点にあり、これは人間による芸術創造において、神の創造の行為に匹敵する創造的な力として働くと考えられている。そして「想像力」を「形成し、変容させる力」(shaping and modifying power)、「統一的、魔術的な力」(synthetic and magical power)、相反する性質を有するものに均衡と調和を与え、一つの中心力となって、異質な部分を結びつけ、「一つの優美な全体」(one graceful whole)を有機的に創り上げる力であると説明している。コールリッジにおいては、想像力は大自然を創造した神に対する信仰と密接に結びついており、ベーメの体系における救済の過程でキリストと同等の役割を担うのは芸術家、詩人となっている。芸術家は、物質のなかに隠されている「本質」(essence)が現われ出るようにし、固定した現象としての「所産的自然」(natura naturata)から生成変化する「能産的自然」(natura naturans)の次元にまで高め、再び自然に生命を与えなくてはならないと、次のように述べている。

芸術家は、物のなかに存在するもの、形や姿を通じて発動し、シンボルによって我々人間に語りかけてくるもの—すなわち自然の霊 (spirit of nature) を、我々が愛する人を無意識のうちにまねるように、模倣しなくてはならない。というのは、そのようにしてはじめて、芸術家は、対象に対して真に自然であり、効果において真に人間的な作品を創造することが出来るからである。形を創りあげる観念は、それ自体形ではあり得ない。それは形を超えたものであり、その本質であり、個別性の中の普遍性であり、あるいは個別性それ自体であり、内在する力のひらめき、現

---

32 『文学的自叙伝』、259頁；BL, ch.13, pp. 363-64: “The Imagination then I consider either as primary, or secondary. The primary Imagination I hold to be the living power and prime agent of all human perception, and as a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I AM. The secondary Imagination I consider as an echo of the former, co-existing with the conscious will, yet still as identical with the primary in the kind of its agency, and differing only on degree, and in the mode of its operation.”



われである。<sup>33</sup>

もし芸術家が、単なる自然すなわち「所産的自然」を模写するだけならば、何と意味のない競争であろうか。もし芸術家が、与えられた形体のなかから進み出すとするならば、… 何と彼の作品には常に現実性がないことであろうか。… 芸術家は、本質すなわち「能産的自然」を会得しなくてはならないという私の言葉を信じてくれたまえ。<sup>34</sup>

コールリッジは、詩は模倣芸術であり、単なる「模写」(copy)とは全く異なると述べている。詩人は自然を「模倣」(imitate)し、目に見える自然の内奥に美、音楽的状态、象徴的な内的言語を見出さなくてはならない。「詩はまた純粋に人間的である」<sup>35</sup>と述べられているように、詩において自然は人間化される。これはベーメの体系における、第二のアダムによる自然と人間との間の統一的な調和の回復に相当すると考えられる。

さらにコールリッジにおいては、ベーメにおける神、光、自由な愛、喜びに向かうイマギナチオンに相当するのは「想像力」、神の創造の現実から遊離する方向に働く連合効果のみの想像力に相当するのは「空想力」(Fancy)と区別されており、『文学的自叙伝』に「空想力」について次のように記されている。

それに対して「空想力」が相手とするのは、固定されたものと限定されたもの以外にはありません。実際、空想力は時間と空間の秩序から解放された記憶の一つの様式に過ぎません。それは私たちが「選択」(Choice)という言葉で表している、意志の経験的現象と混じり合い、その現象によって変化させられます。しかし空想力は通常の記憶の場合と同様に、その材料のすべてを、連合の法則 (the law of association) によってすでに作られたものとして受け入れるのです。<sup>36</sup>

コールリッジは、空想力を「集合的で連想的な力」(aggregative and associative power)であり、想像力のような創造的 (creative) な力ではなく、固定したものと戯れ、

33 *The Complete Works of S. T. Coleridge*, vol. 4, p. 333, "On Poesy or Art": "The artist must imitate that which is within the thing, that which active through form and figure, and discourses to us by symbols the Nature-geist, or spirit of nature, as we unconsciously imitate those whom we love; for so only can he hope to produce any work truly natural in the object and truly human in the effect. The idea which puts the form together can not itself be the form. It is above form, and is its essence, the universal in the individual, or the individuality itself, —the glance and the exponent of the indwelling power."

34 *Ibid.*, p. 332: "If the artist copies the mere nature, the *natura naturata*, what idle rivalry! If he proceeds only from a given form, ... what an emptiness, what unreality there always is in his productions! ... Believe me, you must master the essence, the *natura naturans*."

35 *Ibid.*, p. 329: "Poetry also is purely human."

36 『文学的自叙伝』、259-60頁；*BL*, ch. 13, p. 364: "Fancy, on the contrary, has no other counters to play with but fixities and definites. The fancy is indeed no other than a mode of memory emancipated from the order of time and space; while it is blended with, and modified by that empirical phenomenon of the will, which we express by the word Choice. But equally with ordinary memory the Fancy must receive all its materials ready made from the law of association."

修飾的に結び付けるだけの力と考えている。空想力は想像力とは異なり、「所産的自然」の次元にとどまり、「能産的自然」の次元、すなわち「存在」(existence)の背後にある「本質」にまで達することはない。そして彼は、詩は詩的天才の証拠となる想像力によって生み出されるとし、「詩人は、想像力にしたがって描くべきであり、空想力にしたがって描くべきではない」<sup>37</sup>と主張する。<sup>38</sup>

ベーメの思想を受容した上で、コールリッジがエマソンの詩芸術論に影響を与えたのは、主として想像力説と「想像力」と「空想力」の区別が中心であろう。マシーセンは、「コールリッジはエマソンの言語、芸術の有機体説に直接的な刺激を与えた」と記している。<sup>39</sup>エマソンは、想像力と空想力の相違について、コールリッジの学説をほぼそのまま受容し、1835年8月1日の『日記』に、次のように記している。

空想力と想像力の差異は、私には質的なものに思われる。空想力は集合させ、想像力は生命を与える。空想力は世界をそのままに受け入れ、表面的な関係によって快い集団を選ぶ。想像力は幻想(Vision)であり、世界を象徴的(symbolical)であると考え、象徴を真の意味で洞察し、全ての外的物象を象徴(types)として見る。<sup>40</sup>

エマソンの自然論もまた、「1. 言葉は自然の事実を示す記号だ。2. 特定の事前の事実は特定の自然の事実を表す記号だ。3. 自然は精神の象徴(symbol)だ」<sup>41</sup>と『自然論』第四章「言語」に記されているように、ベーメ、コールリッジの、神は自然のなかに顕現し、外的自然には内的言語が内在しているとする自然観を受け継ぎ、自然は象徴的な言語であり、自然と精神は「照応」(correspondence)の関係にあるという思想を基盤に展開されている。さらにエマソンは、第三章「美」に、「自然美は精神のなかでふたたび形をとり、しかもそれは不毛な観照のためではなく、新たな創造のためなのだ。…美を創造することが〈芸術〉だ。…だが自然の美は究極的なものではない。内面的で永遠の美を告知する使者であり、それ自体では実体のある満足する恵みではない。あくまでも部分としての立場を守っていなければならないもので、これまでのところでは、〈自然〉の究極

37 同上書、410頁；Ibid., ch. 22, p. 470: “The poet should paint to the imagination, and not to the fancy.”

38 コールリッジの想像力説については、岡本昌夫『想像力説の研究—イギリス文芸批評における想像力説の形成とその展開』(南雲堂、1967年)、高山信雄『コールリッジ研究』、409-81頁、田村謙二『コールリッジの創造的精神』、197-216頁、山田豊『詩人コールリッジ—「小屋のある谷間」を求めて—』(山口書店、1986年)、223-48頁などを参照。

39 F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York: Oxford Univ. Press, 1941), Acknowledgement, xvii-xviii.

40 *JMN*, 5:76: “The distinction of fancy and imagination seems to me a distinction in kind. The fancy aggregates; the Imagination animates. The Fancy takes the world as it stands and selects pleasing groups by apparent relations. The Imagination is Vision, regards the world as symbolical and pierces the emblem for the real sense, sees all external objects as types.”

41 『エマソン論文集(上)』、57頁；*CW*, 1:17: “1. Words are signs of natural facts. 2. Particular natural facts are symbols of particular spiritual facts. 3. Nature is the symbol of spirit.”

的な根源の最後の、あるいは最高の表現ではない<sup>42</sup>と記し、人間に及ぼす自然の美的作用では不十分で、究極の目的は、人間精神に働きかけて、美を創造することにあると論じている。

そしてエマソンは、エッセイ「詩人」(“The Poet,” 1844)<sup>43</sup>において、詩人の役割は、自然のなかに隠されている象徴的言葉を読みとり、美を創造することにあるとする詩人論を展開する。詩人は「第二の目」(second eye)としての「想像力」によって自然の本質を洞察し、不可視の領域を映し出し、「命名者」(Namer)、「言葉を創る者」(Language maker)として、それぞれの事物にふさわしい固有の名前を与えなくてはならない。彼は詩人を「解放の神」(liberating gods)と呼んでいる。次に記されているように、事物は命名されることによって解放され、一段と高い有機的な形に変貌する。

表現は有機的であり、つまりもの自身が解放されるとわが身に帯びる新しい型だ。…ものが美しい調べに変わるさまは、ものが一段高い有機的な形態に変貌 (metamorphosis) するさまに似ている。あらゆるものの頭上にはそれぞれのデーモン (守護神)、つまり魂が君臨していて、ものの形態が目によって映されるように、ものの魂も何らかの美しい調べによって映される。<sup>44</sup>

詩人を解放者とみなすエマソンの詩人論<sup>45</sup>は明らかに、外的自然の内奥に美と音楽的狀態、象徴的な内的言語を見出し、表現することを詩人の役割とするコールリッジと、第二のアダムとしてのキリストによる自然と人間との間の統一的な調和の回復、人間のみならず宇宙万物の救済というベーメの思想を基本的に受け継いでいると考えられる。<sup>46</sup>

## 4 終わりに

以上、対立者の一致、神人同一、想像力と空想力などの思想概念をめぐって、コールリッジを媒介としたベーメの根幹的思想のエマソンに対する影響について考察してきた。少なくとも本稿においては、ドイツの神秘家ベーメの思想の根幹が、イギリスの詩人思想家コー

42 同上書、54-56頁；Ibid., pp. 16-17: “The beauty of nature reforms itself in the mind, and not for barren contemplation, but for new creation. ... The creation of beauty is Art. ... But beauty in nature is not ultimate. It is the herald of inward and eternal beauty, and is not alone a solid and satisfactory good. It must therefore stand as a part and not as yet the last or highest expression of the final cause of Nature.”

43 酒本雅之訳『エマソン論文集(下)』(岩波文庫、1973年)、103-46頁；CW, 3:24.

44 同上書、128-29頁；Ibid., pp. 14-15: “The expression is organic, or, the new type which things themselves take when liberated. ... Like the metamorphosis into higher organic forms, is their change into melodies. Over everything stands its dæmon, or soul, and, as the form of the thing is reflected by the eye, so the soul of the thing is reflected by a melody.”

45 エマソンの詩人論については、『エマソンの思想の形成と展開』、92-93頁参照。

46 エマソンに対するベーメの影響については、Elizabeth Hurth, “The Uses of a Mystic Prophet: Emerson and Boehme,” *Philological Quarterly*, no. 70 (1991), pp. 219-35; “The Poet and the Mystic: Ralph Waldo Emerson and Jakob Böhme,” *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik*, vol. 53, no. 4 (Jan. 2005), pp. 333-52などを参照。

ルリッジによって積極的に受容され、18世紀後期から19世紀前期のヨーロッパの思想状況を背景にした学術用語を用いながら吟味・検討され、ロマン主義思想として再構成された上で、大西洋を隔てたニューイングランドのエマソンの超越主義思想の形成に直接的な影響を与えたという事実関係を確認することが出来た。そして環大西洋的な視点からヨーロッパの思想家のエマソンに対する影響関係を考察することを通じて、エマソンの思想をベーメを代表とするキリスト教神秘主義思想の流れのなかに位置付けるという当初の目的を、一定程度は達成することが出来たのではないかと思う。さらにドイツ観念論哲学の哲学者シェリングもまた、ベーメの思想をエマソンに伝達する役割を果たしたと考えられるが、このテーマについての詳細な考察は今後の研究の課題としたい。

※本稿は2020年度日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C、研究課題：グローバル・エマソン、課題番号：19K00464）による研究成果の一部である。